

『集量論』第一章におけるサーンキヤ知覚説批判

——その批判方法を中心として——

吉 田 哲

ディグナーガの主著『集量論』の第一章では、ディグナーガの知覚説が提示された後、『論軌』、ニヤーヤ学派、ヴァイシェシカ学派のそれぞれの知覚説が批判され、それに続いてサーンキヤ学派の知覚説が批判の対象となる。ディグナーガが批判対象としてあげるサーンキヤ知覚説においては、五種類の知覚器官の対象は、すべて三種のグナよりなる根本原質から順次展開したものであって、その意味で同質性をもつにもかかわらず、特定の知覚器官によって特定の類の対象のみが把握されるという区別が認められており、その理由は「あらゆる対象が同質のものであっても、それらは、相互に異なる *saṃsthāna* (配列状態, 形状) をもち、それが対象を相互に区別する類 (*jāti*) であり、各知覚器官はそれを把握する」というものである。このようなサーンキヤ知覚説に対してディグナーガは *saṃsthāna* が知覚の対象を相互に区別する根拠にはならないことを論じる。その際のディグナーガの批判方法については、『俱舍論』における経量部の形色 (*saṃsthāna*) 批判との類似性を示すものであることが指摘出来る。特に顕著な類似点は、*saṃsthāna* が視覚器官および触覚器官という二種類の感官によって把握されるものであるとされる点と、複数の *saṃsthāna* が一所を占めることがあり得ないと考えられている点である。ただし、*saṃsthāna* に着目して行われるディグナーガのサーンキヤ知覚説批判においては、その *saṃsthāna* が知覚の諸対象の類となるものとみなされ、それが知覚の対象となることを否定することが主たる批判の目的となっていると考えられる。対象が類ととも

に知覚によって把握されるということは、知覚を「無分別」(*kalpanāpoḍha*)と定義し、その分別を「名称や類などとの結合」(*nāmajātyādiyojanā*)と説明するディグナーガにとって容認できるものではないからである。

(龍谷大学経済学部 講師)